東洋英和女学院

説　教　集

第 9 号



2026

表紙写真について　―中高部メモリアルチャペル―

中高部のメモリアルチャペルには、旧校舎で使われていた窓枠や照明器具、ドアノブ、木製の長椅子などが丁寧に移築・再利用されています。四学年の生徒が集う大講堂とは異なり、現在は高等部のクラス礼拝や聖書輪読会、教員の早天祈祷会など、主に少人数での深い交わりの場として活用されています。

明治時代の卒業生有志寄贈のアンティークオルガンが今も現役で活躍しており、礼拝時には生徒の奏楽による讃美歌の伴奏がチャペル内に響き渡ります。ヴォーリズ建築から受け継がれた木の質感とオルガンの温かい音色に包まれるこの特別な空間は、生徒たちが自分自身や他者と静かに向き合い、東洋英和の伝統である「敬神奉仕」の心を深く育む大切な拠点となっています。

東洋英和女学院

説　教　集

第 9 号

2026

目次

巻頭言
院長
学院宗教部長（六本木校地）
髙橋貞二郎……4

聖書は心のお弁当
院長
学院宗教部長（六本木校地）
髙橋貞二郎……8

知恵ある言葉
学院宗教部長（横浜校地）
野田美由紀……12

世界最古の音楽
大学人間社会学部
総合心理学科教授
小坂和子……16

選ばれて、世に勝った
大学人間社会学部国際学科教授
平体由美……20

変えようとする心と、変えられる心
大学人間社会学部
国際学科准教授
堀川敏寛……24

私たちの心はどこに　中高部聖書科教諭　上野峻一……28
新しい革袋　中高部国語科教諭　寺内玲子……32
私も癒してくださるイエス様　中高部英語科教諭　福本久子……36
みんなの「めあて」はなあに　小学部チャプレン　陣内大蔵……40
「平和」とは　小学部教諭　地主武史……44
全て神さまがお創りになられた　東洋英和幼稚園長　岡田光弘……48
神さまがくださった家族　大学付属かえで幼稚園長　永瀬真澄……52

巻頭言

善き力に、奇跡のように守られて

院　長
学院宗教部長（六本木校地）
髙　橋　貞　二　郎

「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない。恐れてはならない。おののいてはならない。」

申命記　三一章八節

『善き力にわれ囲まれ』という讃美歌があります。その歌詞は、今も多くの人々に深い慰めと希望を与え続けていますが、この曲のもとになったのは、ある牧師が書き残した詩でした。その詩を記したのは、二〇世紀を代表するドイツの神学者・牧師、ディートリヒ・ボンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer, 1906–1945）です。

今から約八〇年前、世界が戦争の闇に包まれるなか、彼は平和の灯を守るために力を尽くしました。今年は、彼

の生誕一二〇周年という記念すべき年にあたります。

ボンヘッファーは一九〇六年、医師の父と敬虔なクリスチャンの母のもとに生まれ、幼少期から音楽や学問に優れた才能を発揮しました。二一歳という若さで博士号を取得するなど、極めて優秀な神学者・牧師として歩み始めますが、まもなくナチス政権の台頭という激動の時代に直面します。

ヒトラーによる教会支配が強まる中、彼はそれに激しく抵抗し、「告白教会」と呼ばれる抵抗運動の結成などを通して信仰を守り続けました。やがて、悲惨な戦争を終わらせ、平和を取り戻すために反体制組織に加わりますが、一九四三年に秘密国家警察（ゲシュタポ）に逮捕されます。収容所内でも囚人たちの精神的支えとなり続けましたが、ヒトラー暗殺計画（抵抗運動）への関与が発覚し、ドイツ敗戦の直前である一九四五年四月、弁護もないまま即決軍法会議にかけられて死刑を宣告され、三九歳で天に召されました。

逮捕され独房へ送られた彼が、どれほど不安で孤独であったかと思わされます。しかし、彼は決して孤独ではありませんでした。一九四四年の終わりに彼が獄中から家族や婚約者へ送った手紙には、皆の祈りや聖書の言葉、過去の思い出や音楽が、かつてないほど生き生きとした現実感を持って寄り添っている、と記されています。それはまるで「大いなる見えない王国」のようであり、自分は孤独ではないし、見捨てられていると感じたこともないというのです。

そして、この手紙に記されていたのが、のちに讃美歌『善き力にわれ囲まれ』のもととなり、今も多くの人々の心を照らし続ける詩『善き力に』でした。その冒頭と結びの言葉をご紹介します。

善き力に真実に、静かに取り囲まれ、
奇跡のように守られ、慰められて
この日々を、私はあなたたちと共に生きようと思う。
そして、あなたたちと共に新しい年へと歩んで行こう。

（中略）

善き力に、奇跡のように守られて、
私たちは心安らかに、やがて来るものを待とう。
夜も、朝も、そしてどの新しい日にも、
神は必ず、確かに私たちと共にいてくださる。

私たちの学院は、今年創立一四二周年を迎え、一四三周年に向けて新たな歩みを始めました。これまでの歩みは決して平坦な道ばかりではありませんでした。しかし、冒頭の聖句にある「主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない」という約束の通り、そしてボンヘッファーの詩が語るように、学院は常に神の善き力に、奇跡のように守られて今日まで導かれてきたのです。「夜も、朝も、そしてどの新しい日にも、神は必ず、確かに私たちと共にいてくださる」というこの約束を深く心に留め、「敬神奉仕」の精神を実践しながら共に新しい一年を歩んでまいりたいと思います。

また、今、世界に目を向けるとき、残念なことに争いの闇は終わりを告げようとしていません。ボンヘッファーが聖書を大切にし、命を懸けて平和のために尽力したように、私たちも聖書のみことばを心に留め、それぞれの場所で平和のために力を尽くしていきたいと思います。創立記念日に刊行されるこの説教集が、手にする皆さまの日々の歩みに豊かに用いられ、平和を生み出すための道しるべとしてお役に立ちますよう、祈り願っております。

（注）ボンヘッファーの詩『善き力に』には複数の作曲家によって旋律が付けられており、ジークフリート・フィーツ作曲による美しい楽曲や、日本ではオットー・アーベル作曲による讃美歌（『讃美歌二一』四六九番）などが広く親しまれています。

参考文献：クリスティアーネ・ティーツ（著）、橋本祐樹（訳）『ディートリヒ・ボンヘッファー 抵抗に生きた神学者』二〇二五（新教出版社）

聖書は心のお弁当

院　長
学院宗教部長（六本木校地）
髙橋　貞二郎

マタイによる福音書　四章四節

イエスはお答えになった。「「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある。」

これから、「聖書は心のお弁当」という話をしたいと思います。

私は院長になる前、約二五年間、ここ中高部で聖書科の教師として授業を担当してきました。中学一年生の最初の授業では、必ずこんな質問をしていました。

「聖書を手に取って、開いてみてください。どんなふうに感じますか」

すると、こんな声が返ってきます。

「重いなあ」

「文字ばっかり」
「難しそうだなあ」
中には、「先生、絵はないんですか」という質問もありました。
確かに聖書は、重くて、文字ばかりで、少し難しそうに見える本です。皆さんが持っている聖書には、挿絵もありません。
ですが、聖書は、これまで世界中の人々に、大きな影響を与えてきました。
例えば、マザー・テレサです。
インドで貧しい人々に寄り添い、助け、共に生き続け、ノーベル平和賞を受賞しました。マザー・テレサは、聖書にある「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」というイエス様の言葉などを大切にしました。
そして、一人ひとりの中にイエス・キリストがおられると思い、どのような人も大切にして、愛し続けたのです。その生き方が、世界に認められました。
また、“I Have a Dream”の演説で知られるアメリカの、マルティン・ルーサー・キング牧師もそうです。聖書に基づいて、「人は皆、平等である」と語り、非暴力で、人種差別撤廃を訴え続け、公民権運動を展開し、ノーベル平和賞を受賞しました。
このように、聖書は、多くの人々に影響を与え、世界をも動かしてきました。
ここ東洋英和女学院を創立した、ミス・カートメルをはじめ、その後に来日された婦人宣教師たちにも、もちろ

ん、大きな影響を与えてきました。

偉人や有名人だけではありません。もっと身近なところで、今も、私たち一人ひとりの心に働きかけています。

さて、私たちの体を支えるものの一つに、お昼のお弁当があります。お弁当を食べると、午後も頑張る力が出てきます。

それと同じように、聖書は、私たちの心を支え、力を与えるものです。ですから私は、授業でいつもこう伝えていました。

「聖書は心のお弁当」

初めて聞いたとき、「えっ、何それ」と笑う人もいます。とても自然な反応だと思います。ですが、これは、後になって「なるほど」と分かってくれる言葉だと思っています。

悲しいときには慰めを。希望を失いそうなときには、希望を。何かにチャレンジしているときには、さらに力を与えてくれる。それが聖書です。

今日、読んだ箇所に、こうあります。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」

私たちは、体のための食べ物だけでなく、心のための〝食べ物〟も必要としています。そして、それを与えるのが聖書です。

お弁当にいろいろなおかずがあるように、聖書にも、さまざまな言葉があります。すぐに分かる言葉もあれば、少し難しく感じる言葉もあります。けれども、その一つひとつが、私たちを生かすために与えられた、意味のある

大切な言葉です。

皆さん、「聖書は心のお弁当」です。この言葉を覚えてくださるとうれしく思います。

これからも、共に、この聖書を読み、豊かな学校生活を送ってくださることを願っています。

知恵ある言葉

学院宗教部長（横浜校地）　野田　美由紀

箴言　一五章一節

柔らかな応答は憤りを静め
傷つける言葉は怒りをあおる。

聖書には、言葉に関する教え、勧めがたくさんあります。今日は旧約聖書の箴言から一節だけを読みましたが、箴言だけでも言葉について語っている部分は他に多くあります。すぐ後に続く二節にも「知恵ある人の舌は知識を明らかに示し　愚か者の口は無知を注ぎ出す」と言われていて、説教の題はそちらから取りました。新約聖書にも、言葉について戒めるような教えは数多く見られます。

先ほど読んだ聖書の言葉は、誰でもよくわかるのではないでしょうか。「柔らかな応答は憤りを静め　傷つける言葉は怒りをあおる」。ここに言われていることはたぶん大抵の人が経験したことがあるのではないかと思います。誰かと話していて、相手の話し方や言葉の選択によって、自分の感情が静められることも波立つこともあります。

また、自分が語った言葉で人の気持ちを和らげたり、その反対に人を怒らせたりしたということも、何かしら経験があるのではないでしょうか。

「柔らかな応答」というのは、語り口だけのことではないと思います。もちろん、私たちは同じ言葉を口にしたとしても、表情や声のトーンによって相手の感情やその場の空気を和らげることもあるし、とげとげしくさせることもあります。だから言葉の選択だけでなく、それをどんなふうに語るかということも大事です。

最近はいろいろなところでＡＩが作文して話しているような言葉を見聞きしますが、私たちは人間なので、同じ言葉を話しても言い方や顔つきによって別の、またはプラスアルファのメッセージを伝えることもできます。相手が怒っている時、その怒りをなだめ、静めようとするのか、より怒らせようとするのか、または怒らせてもいいと思うのか、それによって私たちの表情と声は変わります。ですから「柔らかな応答」にはそういうこともちろん含まれるでしょう。

でも、ソフトな話し方や笑顔で空気を和らげ、相手の憤りを静めようとしても、伝える言葉に真実や誠意がなく、その場を取り繕うだけの言葉だったら、場合によっては怒りをあおるようなことになるかもしれません。やはり、どんなふうに話すかだけでなく、その前に、何を（どんな言葉を）話すかということが大切だと思います。

聖書が言葉について多くの戒めを語っているのは、ひとつには私たちが言葉をもって人を傷つけたり欺いたりすることもあるし、大きく言えば言葉によって罪を犯すこともあるからだと思います。新約聖書のヤコブの手紙には、「言葉で過ちを犯さないなら、それは全身を制御できる完全な人です」という言葉があります。それほど私たちは言葉で過ちを犯すことの多い者だということでしょう。

最近は人間以外の生き物でも言語をもっている、というか言葉でコミュニケーションをとっている、といった研究も進んでいるようです。皆さんの中には、飼っているペットと会話ができる、相手は自分の言葉を理解しているし、むこうの言っていることもよくわかる、という方もいるかもしれません。ただ、人間ほど高度なコミュニケーションができる、複雑な思考や感情を言葉で伝えることができる、という動物はいないのではないでしょうか。他の動物との比較はともかく、人間に言葉が与えられていることはやはり大きな恵みだと思います。だからこそ、言葉をどのように用いるか、言葉を用いて何をするか、ということが重要なのです。

私たちは意図せずに言葉によって人を傷つけることもあるし、自分が傷つくこともあります。時にはわざと人を傷つける言葉を口にすることもあるかもしれません。自分では言葉に気をつけたつもりでも、それぞれの考え方や感性が違う以上、絶対に誰も傷つけないということは難しい気もします。それでも、私たちは言葉を介して人と、また神様とも、語り合うことができるし、それは貴重で感謝すべきことだと思います。

人を傷つける言葉で怒りをあおるのではなく、柔らかな応答で憤りを静めるほうがよいと言われるのは、それが人間同士の関係を損ね、断ち切るのでなく、関係を築き、強めることにつながるからではないでしょうか。私たちが言葉を与えられているのは、何よりも、自分の思いや考えを言葉によって伝え、相手の思いや考えをも理解し、よりよい愛や信頼、共存の関係を築くことができるためだと思うのです。この社会、世界には、相手を傷つけ、否定し、関係を断ち切るどころか人を滅ぼしかねないような言葉が飛び交っている現実がありますが、それは知恵ある言葉とは言えないと思います。

柔らかな応答とは、人の言葉を聞き、それを受け止めながら、自分も伝えたいこと、伝えるべきことを愛と配慮

をもって語る時にできるものではないでしょうか。私たちは言葉をもって人を傷つけることも、自分自身を貶めることもあります。でもそうではなく、人を活かす言葉、関係を造り上げる言葉を語れるように、そのために必要な知恵をもつことができるようにと願います。

世界最古の音楽

大学人間社会学部総合心理学科教授　小坂和子

詩編　一四九編一節

ハレルヤ。
新しい歌を主に向かって歌え。
主の慈しみに生きる人の集いで賛美の歌をうたえ。

昨秋の土曜日、弦楽二重奏のコンサートに出かけました。大学の礼拝堂の半分くらいの、とても小さな教会が会場です。スイスのバーゼルで学んだ日本人バイオリニストとスイス人の二人の女性が、毎年のように、東京とチューリヒで企画を立てて音楽会を開いているのです。今年のテーマは、民俗音楽、日常に広まっている音楽です。お話で言うと、地方に伝わっているおとぎ話、のような音楽をあつめたプログラムでした。もっとも感激したのが、「世界最古の音楽」と言われる、「セイキロスの墓碑銘」という楽曲です。二千年以上も前のメロディーから始まり、即興で、バリエーションへと変奏がすすみ、最後には音楽的に連関のある、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」へと展

開しました。

「セイキロスの墓碑銘」の楽曲とは、現在のトルコの沿岸部の都市、アイドゥン近郊で見つかった、紀元前二～一世紀ごろの墓石に刻まれた歌です。新約聖書に、「エフェソの信徒への手紙」がありますが、このエフェソの街に近いところです。

ギリシャには、これより古い楽曲の断片があるようです。厳密な意味で、世界最古の音楽というならば、横浜のキャンパスの森に響いているような、ことりたちのさえずり、動物たちの遠吠えや、葉々を揺らす風、流れる水音かもしれません。人の奏でる音楽ならば、赤ちゃんのクーイング、ご機嫌の時に出す声と呼応してお母さんが調子を合わせる幸せなユニゾンやデュオこそがふさわしいようにも思われます。それは眠りを誘う、子守歌の原型でもあります。おそらくは、悲しみの歌、死者を送る時の慟哭の祈りと声もまた、原始の時代から始まっていたことでしょう。

この墓碑は、セイキロスという人が、妻のエウテルペのために建てたもので、短い歌詞と音程のマークと、音の長さのメモがかかれた、いわゆる「譜面」が石面に残っており、現存する世界最古の楽譜です。

そこには、こんなことが書いてあります。

「私は墓石です。セイキロスが建ててくれました。決して死ぬことのないとこしえの思い出に」

あなたが生きている間は、輝かしい日々を過ごしてください。
悲観的になることはない。
人生は短く、時間（クロノス）は限りを求めるものだから。

夫が残された妻に向けてささげた歌であり、死と生の境の標の場でもある墓地をおとずれる人が、この譜面をみながら、「生きることの意味」を口ずさみ、慰められることを願ったのでしょう。「墓石」は、セイキロスを死の世界に迎え入れる入り口であり、この世に生きる人にあてた手紙でもあります。

旋律は、YouTubeで容易に探すことができます。「私は墓石なんです。作ってくれたのはセイキロスさん」と始まり、とても穏やかな、風が静かにわたっていくような旋律です。祈りの楽曲は、時間を超えて空間を超えて、心の中で目に見えない支えとなっていくことを人類は経験してきました。

古代の世界ではコミュニティが形成されるなか、個人が自分の想いを込めて記号や造型を刻んでいきました。自分の使命を感じて、一文字に一筆に粘土のひとかけらに意味を感じること、これが創作のミッションであったのではないかと思います。それを大いなるものとも、天啓とも神の愛とも、呼ぶことができるでしょう。

ちなみに、この墓石は、発掘した工事監督が家に持ち帰ったところ、妻がまさかそんな大事なものとは知らずに、すえつけ具合をよくしようと、下部を切り取ってしまったそうです。結果として、墓石面の最後の部分が消失し、いったいそこにどんなメッセージが書いてあったのか、もはや知ることができません。ところが、ミロのヴィーナ

スの腕が欠けているからこそ美しいと言われるように、この墓碑も未完の作品として芸術的価値が高まったというミステリーが誕生しました。実体の消えたところにこそ、真実なるものを体験できるということかもしれません。

新約聖書には、イエスの語りがそのまま記されています。音楽のように、また民話のように、口伝えで人から人へと渡っていきました。そして、それを書き物として記すことを人は選びました。現代に生きる私たちは、もはやイエスの姿を見ることはできず、声を聞くこともできません。でも、その語りにこころの耳を澄ますと、あの頃の人々と共に、もうひとつのみえざる世界を心に構築し、体験していくことができます。また旧約聖書にしるされている数多くの賛美の歌は、この地で日常を生きる人々が、深い祈りを天の大いなる神に捧げた証です。

これらの古代の音楽は、目覚めと眠り、日常と祈り、生と死といった、境界と時空間を超えていくところに生まれてきました。音楽は、未知なるものへと向かっていく毎日を支えるために与えられたギフトなのでしょう。

新しい年度を迎えて、それぞれの新しい歌を心に感じつつ、ご一緒に、未知なる世界へと進んでいけたらと思います。

選ばれて、世に勝った

大学人間社会学部国際学科教授　平体由美

ヨハネによる福音書　一五章一六節

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」

大学はいま、受験生の女子大離れと都心志向、すぐに役に立つ実学志向の流れの中で、苦しい状況に置かれています。振り返ってみれば東洋英和女学校は、その最初の段階から決して楽な道のりではありませんでした。キリスト教に立脚した女子教育を打ち出したはいいものの、開学時に在籍したのは生徒わずか二名という、経営の視点からはまず「成り立たない」スタートでした。

東洋英和の創立者であるミス・カートメルは、キリスト教の伝道を第一に考えつつ、その基盤づくりとして、社会で後回しにされていた女子への教育に尽力しました。教育を、神の御心を伝えるための手段として活用しようと

したのです。しかし世はそのようには受け止めませんでした。ミス・カートメルが奔走したいわゆる「鹿鳴館時代」に、東洋英和女学校は英語と西洋風のマナーが身に着く学校として、上流階級の間で評判を得ていきます。明治版の「すぐに役に立つ」教育として評価されたのでしょう。

しかし順調に拡大するかに思われた東洋英和女学校は、社会が保守化するにつれて敬遠されていくことになります。ミス・ブラックモアの時代には、文部省訓令第一二号により、キリスト教教育を行う学校は上級学校に進むことができない「各種学校」と位置づけられました。すべてのキリスト教学校が、キリスト教教育を核に据えるのか、それとも看板を下ろすのかの選択を迫られました。ミス・ブラックモアはここで、キリスト教教育の維持を決断します。これは世間が考える「役に立つ」「得になる」に阿ることなく、学校の理念を堅持したものでした。しかし、西洋風の教育への懐疑が東洋英和女学校への入学者を減少させただけでなく、台風による二度の校舎倒壊という困難が襲います。経営的にはもちろんのこと、生徒や教職員にとって精神的に大きな打撃だったでしょう。神の御言葉に従う恵みなど綺麗ごとでしかない、結局はどれだけ生徒を集められるかの経営の問題だ、との心の声が聞こえてきそうです。二回も校舎を倒壊させるなど、神は実は学校の存続を望んでおられないのではないか、と考える人もいたでしょう。しかしミス・ブラックモアは言いました。「雨の後には虹が出ます。恵みの虹を信じましょう」。

本日お読みしたヨハネによる福音書一五章一六節、「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました」は、ミス・カートメルが常々愛読していた箇所だと伝えられています。一八七〇年代に静岡で伝道活動を行っていたデヴィッドソン・マクドナルド宣教師がカナダに一時帰国した際、ある教会の集会で問いかけました。日本伝道の成功には女性への伝道が鍵になる、その役目を女性伝道師にお願いし

たい、誰かその役割を担ってくれる人はいないか。教会は満員でしたが、聴衆は無言で座っていました。その時、ミス・カートメルが立ち上がりました。「私でよろしければ、どうぞお用いください」。教会の人々は驚いてただ見つめていたとの逸話が残っています。

このエピソードを読むたびに、私だったらどうしただろうかと思いをめぐらします。私は聴衆の一人として、ただ黙って周りをちらちら見回し、立ち上がったミス・カートメルを驚いて見やる一人ではなかったかと思うのです。あるいは日本伝道の体験談を聞きに、わざわざ教会に行くなどということはしなかったかもしれません。

しかしミス・カートメルはその招きを受け止めて、カナダからはるばる日本にやってきました。なんという勇気と覚悟、そして神への信頼でしょう。そして、本日の讃美歌（「讃美歌」四六三番）で歌ったように――ささやかなるしずくすら海になり、細かい砂も山になる、ということを確信しておられたのでしょう。この讃美歌はミス・カートメルの愛唱讃美歌で、階段を上り下りしながら口ずさんでいたと当時の生徒が振り返っています。

主はすべての人々に福音を伝えるご計画を持っておられます。その実現のために、時と場所に応じた小さなご計画をたくさん用意し、それぞれに適切な人をお選びになり、配置しておられます。ここに集う私たちもその一部です。私たちは偶然にここにいるのではなく、神様のご計画と愛によって招かれ、導かれているのです。

さらに、この節は私たちに「行って実を結び、その実が残るように」と命じています。その実が残るように、私たちが求めることに対して、主はすべてを取り計らってくださいます。主は私たちがあれこれ願うことをかなえるために居られるのではなく、神の定めた実を結ぶための働きに奔走している時に、必要なものを必要な時に与えてくださいます。時には台風で校舎が倒壊するかもしれません。それでも、主の御心のために私たちが働くのであれ

ば、主は校舎の倒壊さえも後の恵みになるように取り計らってくださいます。

ヨハネ一六章三三節は言います。「世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました」。数字を求める世、目先の名誉を求める世、いま役に立つものを求める世、この中にあって、世に阿るのではなく、神の恵みと栄光を確信することによって、東洋英和は存続してきました。そしてこれからも、神のご計画の一部として立ち働くとき、つまり「敬神奉仕」の精神を受け継ぎ次の世代に手渡していくとき、東洋英和は地の塩、世の光としてここにあり続けることができるのです。

変えようとする心と、変えられる心

大学人間社会学部国際学科准教授　堀川敏寛

ローマの信徒への手紙　一二章二節

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

二〇二六年五月一〇日は「母の日」でした。皆さんも、お母さんに「ありがとう」と伝えたり、家族のことを思い出したりしたのではないでしょうか。実は、この「母の日」はアメリカで始まった習慣です。そして、その背景には、メソジスト教会の働きがありました。本学のキリスト教も同じメソジストの流れをくんでいますが、この宗派は、特別な人だけのための宗教ではありません。家庭や学校、仕事や地域社会など、人々の日々の暮らしの中に信仰を見いだそうとしてきました。だからキリスト教は、礼拝堂の中だけのものではなく、私たちが毎日出会う人間関係の中でこそ、問い直されるものなのです。

皆さん一年生も、入学して一か月ほどが過ぎました。最初は「まず友達を作ろう」と思い、いろいろな人と話を

したことでしょう。しかし少し時間が経つと、「この人とは気が合う」「この人とは考え方が違うかもしれない」と感じ始めるものです。それは決して悪いことではありません。大学とは、自分が何を学び、何に関心を持ち、誰と時間を共にしたいのかを、自分自身で選び取っていく場所だからです。最初は漠然としていた人間関係も、自分の価値観や興味が少しずつ形になるにつれて、自然に変化していきます。

このように、自分で選び、自分で歩んでいく主体性は、実はキリスト教のプロテスタンティズムが大切にしてきたものでもあります。もちろん、キリスト教には神の導きや招きがあります。しかし、それは人間がただ命令に従うということではありません。神から与えられた自由の中で、「私はどう生きるのか」「私は何を選ぶのか」を問い続けることが、信仰の歩みなのです。

さて、今日のテーマは「変えようとする心と、変えられる心」です。実は最近、ある人から「変わってほしい」という言葉を、強く向けられたことがありました。その言葉が、しばらく心に残りました。もちろん、その人は私を傷つけようとして言ったのではありません。人は、相手を思うからこそ、「変わってほしい」と願います。しかし、その願いは、ときに相手を苦しめることもあります。そして、その出来事を通して気づかされたのは、私自身もまた、誰かに対して「変わってほしい」と思いながら生きているということでした。家族に対して。友人に対して。同僚に対して。そして、ときには自分自身に対しても「もっとこうなればいいのに」や、「こんな自分では駄目だ」と思ってしまいます。

そのような私たちに対して、使徒パウロはローマの信徒への手紙で「心を新たにして、自分を変えていただきなさい」と、語ります。ここで印象的なのは、「自分を変えなさい」ではなく、「変えていただきなさい」と語られて

いることです。私たちは、自分も他人も、自分の力で変えようとしがちです。しかし聖書は、人間とは、神によって少しずつ変えられていく存在なのだと語ります。その変化は、急ぐ必要もありません。まして、他人が強制するものでもありません。歴史を振り返れば、キリスト教は宣教の名のもとに、「相手を変えること」を目指しすぎた時代がありました。善意から始まったはずの働きが、異なる文化や価値観を否定するきっかけになってしまったこともあります。だからこそ、現代の私たちは、「他人を変えること」ではなく「自分自身が神によって変えられていくこと」に信仰があると、もう一度確かめる必要があるように思えます。

今日歌った讃美歌「球根の中には」は、そのことを美しく歌っています。球根は、外から見れば、小さくて、地味で、何も起こっていないように見えます。しかし、その内には、まだ見ぬ花が眠っています。いつ芽吹くのか、どのような花を咲かせるのか、それは人間には分かりません。神だけが知っておられます。キリスト教では、一人ひとりの人生も、この球根のようなものだと考えます。私たちには、それぞれ神から与えられた賜物があり、その成長には、その人だけの時間があります。

だから、相手に「変わってほしい」と願う気持ちも、自分の嫌な部分に悩むことも、決して無意味ではありません。それらもまた、球根が芽を出すまでの大切な時間なのです。神は、人を「善い」「悪い」と単純に分けて見ておられるのではありません。一人ひとりが持つ球根を見つめ、その成長を忍耐強く待ち、水を与え続けてくださるお方です。だから私たちも、「他人に変わってほしい」「自分はすぐに変わらなければならない」という焦りから少し自由になってよいのではないでしょうか。

神が私たちを育ててくださることを信じ、自分自身の歩みを大切にしながら、同時に隣にいる人の歩みも尊重し

ていく。そのような主体的で、しかし謙虚な生き方こそ、キリスト教が私たちに示している道なのだと思います。

私たちの心はどこに

中高部聖書科教諭　上野峻一

マタイによる福音書　六章一六～二一節

「断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。あなたは、断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」

「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」

一、二年前だったと思います。ある生徒からの問いでした。「偽善でも、ボランティアはした方がいいでしょう

か」。偽善的なボランティアはやるべきか、意味はあるのか。少しドキッとしました。けれども、私の答えはハッキリしていました。偽善がまったくないボランティアなんて、人間にはできません。一〇〇％純粋な良さ、完全な善なんてありません。それを実行できたのは、この世界でただ一人、神の御子イエス・キリストだけです。私たち人間には無理です。どこかに何かが混ざります。もしかしたら一時的には、極限まで私利私欲をゼロに近づけられる人はいるかもしれません。しかし、どんな時もずっと変わらず……というのは、やはり難しいでしょう。「絶対」というのは主なる神様だけです。先日、小学二年生の娘が夕食の席で熱弁していました。「パパ、学校で皆すぐ「絶対」って言うんだよ。絶対は神さまだけなのに」。さすが牧師の娘です。一体どこで誰に習ったのでしょう。「だって、パパ言ってたじゃん。私たち人間は間違えちゃう。絶対は神さまだけって」。どうやら私のせいでした。

今日の聖書の断食、これは当然ダイエットのためではありません。ダイエットなら自分のためです。断食は食欲を絶って、神様へと心を向けるためです。つまり、主のためにする断食です。それが結果的に自分のためにもなることはあったかもしれません。断食している人は、神様をちゃんと信じている信仰心があるとも考えられます。しかし、ここでも問題は人の目です。断食は、食事を取らないから苦しいものです。その苦しさは自分と神様との関わりだから、本当は一人で勝手にやっておけばいいのです。ところが、断食アピールをする人たちがいました。これは施しも、祈りも同じです。自分はやっていますと、どうしてもアピールして言いたくなってしまうのが人間です。断食している時に敢えて、より一層、苦しそうにします。褒められたい、認められたい、感謝されたいと思うのが、私たちです。だから、完璧ではありません。絶対なんて言うことができません。それが人間です。イエス様は続けます。「あなたの善いことが人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためであ

る。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」。ここに記されている父とは、言うまでもなく、私たちが決して見ることができない「天の父なる神様」のことです。

今日も大講堂にカメラが入っています。戦時中のクラス日誌を使った聖書の授業、その授業をしている様子を撮影したいと言われた時、正直に言って困りました。テレビに映るなんて、思いっきり人の目につくことだからです。ある人は、これは学校の宣伝になると言いました。ある人は、これはキリストの福音の伝道になると言いました。しかし、そういうことを何度言われても、どこか違和感が残ります。聖書の授業は一人ひとりの名前を呼んで、今この時、ここにいる英和生のためにあります。取材のためでも、日本中で平和教育に悩んでいる人のためでもないと考えていました。けれども、それもまた違うのかなと、今日の説教の準備のために祈りつつ御言葉によって気づかされました。

イエス様は語ります。「あなたがたは地上に富を積んではならない。……あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」。富というのは、お金や財産です。もっと広く考えるなら、自分の大切なものです。大切なものは天に積み上げて、やっぱりここでも人に見てもらおうとしないのです。人に見られないために天に積み上げるのは、財産が狙われるとか、批判されるとか、そういう話だけではありません。自分自身の「心」をどこに置くのかということです。私たちの心は、いつだって落ち着かずにフラフラしています。授業中だって「眠い、お腹空いた、金欠、帰りたい」と、心ここにあらずと言えます。もし自分の心をしっかりと天の父なる神様のもとに置いておけば、そこから広く全体を見渡せます。そうすれば、この地上における自分の心の置き場をきっと見つけられるはずです。今この時、自分の心があるのか。大切なものが天にしっかりとあるからこそ、本当に大事なことを見失わず

に、自分の心のあり方がわかるのです。

善いと言われることする時、自分の心をちゃんと天の父なる神様のもとに置きます。そうすることができれば、たとえ偽善と言われようが、あるいは人の目だって気になりません。自分が偽善者なんて百も承知です。偽善のない人なんていません。間違えない人だっていません。しかし、大事なことは、私たちが何かを成す時、目指すべき方である主イエス・キリストをしっかりと見つめることです。自分の富をちゃんと天に積んで、自分の心のあるべき姿を求めながら、完全を目指して進み続けることです。偽善だっていい。間違えたっていい。失敗したっていい。それでも、諦めずに前に踏み出した時、その一歩は、これまでとは全く違う新しい道を必ず進んでいます。その姿は、きっと私たちが考えている以上に他の誰かの力にもなっています。そして、東洋英和という学校で主の御言葉に聴く私たちが、このような存在としてあることを、誰よりも何よりも天の父なる神様が喜んでおられるのです。

新しい革袋

中高部国語科教諭　寺内玲子

マタイによる福音書　九章一四～一七節

そのころ、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、「わたしたちとファリサイ派の人々はよく断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか」と言った。イエスは言われた。「花婿が一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食することになる。だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。新しい布切れが服を引き裂き、破れはいっそうひどくなるからだ。新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。そうすれば、両方とも長もちする。」

四月になりました。みんな一学年進級しました。

この学校に随分長く勤めてきた私は、今日この日、「大掃除」の日の礼拝を何度も経験してきました。調べてみ

たら、二〇〇八年　二〇〇九年　二〇一三年にお話をしており、その三回とも同じような内容でした。捨てることの大切さ、欠落感を埋めるために集め続けてごみに埋もれてしまった人の寂しさについて。

読み返して、何かを捨てたいという気持ちが過去から現在に至る自分の中にずっと存在していたことに気づかされました。

皆さんはものを捨てられますか？　生を受けてそれ程時間のたっていない皆さんには考えたこともない質問かもしれません。私は、ごみ、はためないまでも、多くのものをためこんで生きてきたように思います。そんな自覚のもと私は「断捨離」決行中です。

例えば、国語科の研究室にある本やノート。

一日一冊捨てるか、自宅に持ち帰るかすれば本棚は少し軽くなる、そんな決意をして研究室へ行き、改めて本を眺めてみました。すると、自分では買った覚えも読んだ覚えもない本がありました。

『藤田嗣治』というタイトル。一九六九年初版発行。一九六九年、私は既に生まれています。しかし、物心はついていません。有名な画家の生涯を描いた本ですが、読めるはずはない本。

そこで思い出したこと……これは中学高校時代にお世話になった先生からいただいた本だ、ということです。私と同じ位の年齢の息子さんがいる社会の先生でした。直接教わったのは中学一年の時だけでしたが、趣味で繋がり、卒業後も交流を続けていた先生です。

趣味というのは、絵を見ることです。先生は見るだけでなく、描くのもご趣味でした。交流の始まりは私が好きな画家として、ある画家の名前を挙げたこと。高校卒業後も、折にふれ先生自作の版画のカード等が送られてきて、

その中にこの本もあったように思います。

当時私は、送られてきた本を読むことができませんでした。仕事や育児に夢中で、手が廻らないというのが正直なところでしたが、先生は咎めるでもなく、何か悩みがあると手紙で愚痴を言ってしまったりする私に、優しく励ましのお手紙を送ってくださいました。

そんな思い出がふわっと思い起こされ、その本を、私は家に持ち帰りました。

さて、皆さんはこれからお掃除をします。清潔な環境を作るために。健康を守るために。そして安定した学校生活を送るために。

眼からの情報を常に脳で処理している人間は、視界に入る物すべてを「処理すべき情報」として脳に認識するので、散らかっているとストレスや疲労が蓄積してしまうそうです。片付けなければ、という気持ちがストレスになることもありますね。だからすっきりした部屋は、安定を生み出します。また、片付けという行為自体が、目の前の作業に集中する「マインドフルネス（今この瞬間に集中する心理状態）」を生み出すのだそうです。ですから私たちが今日行う掃除は、これからの安定した学校生活を送るためのお掃除です。

でも、私のようなためすぎてしまった人には他の意味もあるように思います。物が充満したところからそれを片付けていく過程で、自分の大切なものを見出すチャンスだということです。

古いものを捨て、本当に大切なものを残す……たくさんの本の中で、大切な思い出が甦るようなそんな本を手元に置く……捨てた後に新しいものを入れていく……そのためには片付けていく、という行為が必要なのだと思います。

今日の聖書でイエス様は、ヨハネの弟子とファリサイ派の人々は律法に従って断食をするのに、どうしてイエス様とその弟子は断食しないのか、という質問を受けました。イエス様のお答えは、花婿が一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことはできない、というものでした。断食とは悔い改めや悲しみを表わすもの、そして花婿と一緒にいるということはとても喜ばしいこと、だから、両者は一緒にはなりません。

私たちの花婿はイエス様です。私たちの罪の赦しのために十字架にかかってくださったイエス様を迎えることは私たちにとって大きな喜びです。だから弟子たちは断食をする必要はないのです。

新しいぶどう酒は新しい袋に入れるものだと一七節にあります。新しいぶどう酒とはイエス様が神様から遣わされ赦しを与えてくださるという福音のことでしょう。新しい、まだ発酵を続けているぶどう酒は、新しい革袋に入れなくてはいけないとも言っています。私たちは、「新しい革袋」にならなくてはいけないということではないでしょうか。とはいえ、最後の「両方とも」が、古い革袋と新しいぶどう酒も指すととってみると（正しい解釈かどうかははっきりしませんが）古い革袋を完全に否定しているわけでもないようです。本当に残すべきものを古い革袋に入れて活かしながらも、不要なものはきっぱり捨て、新しい革袋には新しいぶどう酒を入れていく。福音を受け入れ罪を捨てて新しい自分として生きていく。そこには確かな喜びがあると私は思います。

私も癒してくださるイエス様

中高部英語科教諭　福本久子

マルコによる福音書　一章二九～三一節

すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。

同じ本でも時間が経ってから読み返すと新しい発見をすることがあります。そして、そのような本の代表が聖書だと思います。聖書はとても不思議で、何度も読んでいる箇所でも、時によって新しいメッセージが聞こえてくるからです。子どもの頃からずっと礼拝で聖書を読んできましたが、何度もそのような経験をしました。今日はそのような経験を一つ紹介したいと思います。

この箇所に出てくるシモンとはペトロのことですが、ペトロがイエス様の弟子になった物語はとても有名なので皆さん知っていると思います。ある日イエス様と出会い、イエス様に人間を漁る漁師になると言われ、イエス様に

ついていくことを決心したのです。では、ペトロの家族はどのように思ったでしょうか。この聖書の箇所を与えられたとき、聖書科の朴先生が「熱」という言葉には風邪などの病気の熱だけではなく、ストレス、精神的な極度の負担、今後の心配など心労も含まれるということを教えてくださいました。それからペトロの姑が置かれている状況を考えてみてハッとしました。姑とは奥さんのお母さんのことです。つまり、ペトロは結婚していたということです。ペトロは結婚していた、という気づきはかなり衝撃的でした。ペトロのイエス様についていく宣言を姑はどう思ったでしょうか。二〇〇〇年前です。じゃあ私が稼ぐから大丈夫、あなたは自分が正しいと思う道を進んでね、と奥さんが言える時代ではありません。育児が無事に終わって娘も結婚し、自分の生活も婿のペトロが面倒を見てくれるはずだったに違いないのです。一家の大黒柱が相談もなしに漁師をやめてしまった。自分の生活も、何より自分の愛娘の生活はこれからどうなるのか。考えたら具合が悪くなって当然なのではないでしょうか。

今まで何回もこの聖書箇所を読んだことがありますが、ずっとイエス様がこの姑を癒したというイエス様の奇跡の話としてしか読んでいませんでした。今回初めて姑の立場で考えてみたとき、なんとも複雑な気持ちになりました。自分を具合悪くさせた張本人を前にして、一言イエス様に向かって物申したかったかもしれません。けれども、やはりこの箇所のポイントは、イエス様が姑を癒されたということなのだと思います。イエス様はペトロの姑を癒してくださいました。そして続く箇所には、その後ペトロの姑はイエス様たちを「もてなした」と書いてあります。姑をとりまく状況は変わっていなくても、イエス様に癒されることで元気に生きていくエネルギーが与えられたのだと思います。

そんなことを考えていたら、公文和子さんという人のことを思い出しました。公文さんは、私の教会の先輩で、

私の人生のロールモデルととても尊敬している素敵な方です。公文さんはケニアで障がい児の生活をサポートする「シロアムの園」を立ち上げ、子どもたちのために働かれています。公文さんがアフリカにいらしてから二〇年以上経つのですが、アフリカに行く前は、小児科医として活躍されていたお医者様でした。ずっと自分の隣人は誰か、自分が仕えるべき友は誰か、と問い続け、今の活動につながっているのですが、公文さんがアフリカに行くと決めた時のご家族のことを伺ったことがあります。ご両親も教会の大先輩ですが、公文さんがアフリカに行くと言ったとき、とても戸惑われたのだそうです。親として当然の反応だと思います。けれども、最後はご家族が、アフリカに行く背中を押してくださった、と仰っていました。きっとイエス様が公文さんのご家族に力を与えてくださって、送り出すことができたのだろうと思います。

私たちの人生でも、自分にはどうしようもできない状況に巻き込まれることがあります。そしてそれがペトロのように、公文さんのように、きっと応援するのが正しいことであるとはわかるけれど応援できない時、やめて、と言うこともできない時に余計に苦しくなってしまうかもしれません。けれども、そんな私たちであってもイエス様は触れてくださって、生き続けていく力をくださるのだと気づきました。イエス様に癒されたペトロの姑はこの先も何か所か聖書に出てくるそうです。きっとほどほどの距離感でイエス様に従う人になったのだろうなと親近感を覚えました。イエス様は熱心に従う、と決めた人だけではなく、迷ったり疑ったり自信をもって従いきれない人にも寄り添って癒してくださる方なのだと改めて学び、励まされました。

毎朝を礼拝で始めて聖書のみ言葉でエネルギーをいただきながら生活をできることは本当に幸せなことです。皆さんが英和生の間だけではなく、英和を卒業した後も、聖書を読み続ける人生を送れたら良いなと願っています。

人生のいろいろな瞬間を経験する皆さんに神様がその時に一番ふさわしいメッセージを通して愛を伝え続けてくださって、皆さんが元気に人生を歩んでいけることをお祈りしています。

みんなの「めあて」はなあに

小学部チャプレン　陣内大蔵

マルコによる福音書　六章六～一三節

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

おはようございます。もうすぐ夏期学校が始まりますね。とても楽しみですね。準備もいろいろあると思います。忘れ物もしないように気をつけたいですね。帽子やハンカチ、着替えの服やしおりなど、みなさん、準備は丁

寧にしてくださいね。

さて、先生に「夏期学校のめあてはなんでしょう」と聞かれたら、みなさん答えられますか。学年によって使う言葉が違うかもしれませんが、「神さまに感謝をして自然に親しむ」、「友達の気持ちをよく考えて仲良く過ごす」、「決まりやお約束を守る」、「先生や友達の話をしっかりと聞く」、「健康に気をつける」、「自分のことは自分でして、係の仕事にもしっかり取り組む」。どの学年も生活のめあてはこんなふうに書かれていると思います。そして何よりも大きなめあてとして

ヨハネによる福音書　一三章三四節

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

という聖書の言葉を掲げて夏期学校を進めますよね。もちろん持って行く持ち物の一つひとつはとても大切なことですけれども、でも「なんのために夏期学校に行くのか」ということを、決して忘れないようにしなければいけませんね。

今日の聖書のお話は、イエスさまが弟子たちを送り出す場面です。弟子たちは神さまのお話を伝えるために、そして病気の人たちを手当てするために送り出されて行くのです。イエスさまは意外なことをおっしゃいました。「余計なものは持たなくていいよ」。普通は何かあった時のために、あれを持って行きなさい、これを持って行きなさい、なんて言われそうですけれど、イエスさまは違いました。「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた」。

なんでこんなにも荷物を少なくさせたんでしょうか。心配じゃなかったんでしょうか。それはおそらく弟子たち

がいろんな持ち物に気を取られないようにするためだったのかもしれませんね。たとえば今年はワールドカップサッカーがありましたけれど、試合中にユニフォームやシューズのことばかり気にしていたら、何のために試合をしているのかが二の次になっちゃいますね。弟子たちは神さまの愛を伝えるために出かけました。だから大切なことは持って行く荷物のことではなくて、心の中のことでした。何のために行くのか、目的は何なのか、それこそ「めあてはなんですか」と弟子たちに聞いたとしたらきっと、「イエスさまの教えを伝えたい。神さまの愛を伝えたい。大変な人たちを助けたい」。はっきりとそう言ったのではないでしょうか。そのことに集中するために余計なものを持たされなかったのかもしれませんね。それに、必要なものは神さまがちゃんと備えてくださるとわかっていたイエスさまは、弟子たちにそのことを実感してほしかったのかもしれませんね。

夏期学校だけでなく、みなさんにも大きな大きなめあてがありますよね。教室の正面に掲げてある「敬神奉仕」です。神さまを敬い、人に仕える。神さまを大切にすることと、人を大切にすることは繋がっています。つまり「神さまにいつも心を向けて、そして人との関わり合いを大切にしましょう」、そういう大きな目的があります。勉強するのも友達と遊ぶのも、委員会活動やクラブ活動も、ただやればいいというわけではなくて、大袈裟に言えばその全てのことは敬神奉仕という大きなめあてに繋がっているように思います。やるべきことを一生懸命やるということは、神さまに心を向けて自分以外の人のことを大切にするということに関係していくんじゃないでしょうか。自分の能力や才能を磨いて、それを人のために使える人になっていく。それは一人ひとりの命を与えてくださった神さまのことを大切にする、という意味になるでしょう。とても大きな「めあて」ですよね。

そうそう、イエスさまは二人一組で行けともおっしゃいました。一人じゃありません。二人なんです。二人で行

くとなると十二の半分の六チームになっちゃいますけど、イエスさまは「一人で頑張れ」とはおっしゃらなかったんです。確かに知らない場所へ行く時、一人だと少し不安かもしれませんね。でも仲間と一緒ならば協力し合えるし、困った時も助け合えますよね。嬉しいことも喜び合えます。みなさんもそうですよね。学校生活は一人ではありません。友達や先生や家族がいます。だから困った時には助け合える。励まし合える。ちょうど先週、四年生の聖書の授業でイエスさまがパンと魚を五千人に配ったお話をしました。その時にみんなで考えたんです。「喜びは、分ければ増える。悲しみは、分ければ減る」、ということを。イエスさまのようにパンと魚を増やすことや、病気を癒すことは私たちにはできないけれど、嬉しいことは分かち合えばみんなが嬉しくなるし、つらいことは例えば人に聞いてもらったり支え合ったりできると心が少し軽くなるし、そういうことならば私たちにもできるかもしれないですよね。そんなことを考えました。弟子たちにたった一人でなく仲間と一緒に行きなさいとおっしゃったイエスさまですが「あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら……」と、弟子たちが苦労することもわかっていたようです。だからイエスさまは二人一組で送り出したんでしょうね。そして弟子たちは良い結果を出したようですから、きっと大変さも喜びも二人で分かち合ったことでしょう。

みなさんも学校で友達と何か一緒にするときに、「仲間」がいることはありがたいなと考えてみてください。そして、勉強する時も遊んでいる時も、「これは何のためにしているんだろう」ということを少し考えてみてください。そして何よりみなさんは同じ「敬神奉仕」という大きな大きな「めあて」を持った仲間なんです。どうぞそのことをよく覚えておきましょうね。

「平和」とは

小学部教諭　地主武史

マルコによる福音書　一五章六～一五節

ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたというのか。」群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

みなさんは「うれしい気持ち」のとき、自分の気持ちをどんな言葉で表しますか。日本語には、「ときめく」「わくわく」「ほおがゆるむ」「足取りが軽い」「小躍りする」「晴れ晴れとする」「夢見心地」「歓喜する」「目をかがやかせる」「天にものぼる心地」といった言葉があります。

一方、「おこってイライラしている気持ち」のとき、自分の気持ちをどんな言葉で表しますか。「いらいら」「むっとする」「すねる」「虫の居所が悪い」「かっとなる」「八つ当たり」「頭に血が上る」「息まく」「はらわたが煮えくり返る」といった言葉があります。

私たち人間は、神さまから与えられた言葉の力を的確に上手に用いることによって、自分の気持ち、そして相手の気持ちをも深く理解することができるようになります。

学校は言葉を学ぶところです。言葉を学んでいかないと、自分の知っている限られた言葉で生活することになります。うれしい気持ちのときは、常に「やったあ」という言葉に頼ることになるでしょう。怒ってイライラする気持ちのときには、「やばい」「最悪」という言葉に頼ることになるでしょう。自分の思い通りにいかないときに、すべて「最悪」という言葉で済ませている人が増えてきているように思えます。

最悪という言葉は、漢字で書くと、「最も悪い」と書きます。みなさんにとって、最も悪いことはどんなことでしょうか。恵みあふれる毎日の生活の中で、そんなに悪いことが起きていますか。

今日の聖書の箇所こそが本当の「最悪」のことではないでしょうか。人間によって、イエスさまがつかまり、鞭でたたかれ、十字架の刑につけられていく。これが正真正銘の「最悪」です。

イエスさまを追い込んでいったのは、三つの弱い人間たちです。一つ目は政治家たち。政治家に必要なのは市民

からの信頼です。政治家は自らの仕事によって、信頼を得るものです。信頼はコツコツと仕事をし続けることによって生まれるものです。ここでピラトがしたことは、仕事ではなく、群衆に迎合しただけのただの人気とり。ピラトは実際に、イエスさまに対し、「いったいどんな悪事を働いたのか」と声かけをし、同情しているようにも思えます。人気とり、自分の身を守るために、誤った判断をしてしまいました。二つ目は祭司長たち。それまでリーダー的立場であった祭司長たち。真のリーダー、イエスさまの存在を最も受け入れることができなかった人たちです。自分たちが一番であると、思い続けたかったのでしょう。嫉妬。ねたみ。誰もが持ってしまう人間の弱みが浮き彫りとなりました。三つ目は群衆。群衆のほとんどの人は、何が起きたのか、よくわかってはいなかったはずです。イエスさまを実際に見たわけでもなく、イエスさまと直接話したわけでもない人たちによって、「イエスって生意気らしいよ」「自分が王様だっていっているらしいよ」「あいつ最悪だよね」という攻撃を楽しんでしまいました。

最も悲しい「最悪」の場面でイエスさまを十字架につけたのは、人間の弱さです。弱さの源は、「自分の都合のよさ」「ねたみ」「人間のもつ攻撃性」ということがわかります。

一方で、最悪のこと。その反対にあるものは何でしょうか。聖書では最悪の出来事が、十字架を通しての愛、復活へ。そして平和へとつながっていくのです。

ただ最悪のことは人間にとって簡単につくることができますが、平和をつくることはたいへんなのです。

ローマの信徒への手紙一二章一八節には「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。」と書かれています。注目したい言葉は、「できれば」という言葉です。平和をつくりだすために、多くの苦労をしたパウロだからこその言葉だと思います。平和は簡単には実現できないのです。努力を続けていくしかないのです。

形にはなかなかならないかもしれないけど、私たちは共に平和を考え、形にしていくのです。

平和をつくることは、東洋英和のようなキリスト教の学校だけでなく、すべての日本の学校で行われています。教育基本法という法律に、教育の目的が次のように書かれています。「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」。簡単に言い換えてみると、教育の目的は「一つ目は、よい人になること」「二つ目は、平和な社会をつくる人になること」「三つ目は、一人ひとりが輝く社会をつくる人になること」「四つ目は、健康で元気な人になること」ということです。全国一万九千校ほど、五八〇万人ほどの小学生たちが平和をつくることを、今日も大きな目標の一つとして、がんばっているのです。

東洋英和は、特に平和な社会をつくることに力を入れる学校です。なぜなら、私たちにとっての一番の教科書は「聖書」だからです。できる限りかもしれないけど、すべての人たちと平和をつくりだす努力を、聖書を通して学んでいきましょう。

今日の聖書を私たちに照らし合わせると「自分にとって、都合の悪いことをうけとめる」「人はひと。自分は自分。ねたみや嫉妬はやめる」「人の悪口をいっている人たちの中には入らない」「グループの判断ではなく、自分で判断する」「だめなことはだめと伝え合う」といったことが平和を実現していくことなのかもしれません。

私たち小学部生は韓国、オーストラリア、フィリピンの方々と深く関わっています。韓国の先生が「異なる国に一人でも友達がいることは平和への大きな一歩」とおっしゃっていました。本当にその通りだと思います。たった一人とでもよい、平和を共に作り出していきたいものです。

全て神さまがお創りになられた

東洋英和幼稚園長　岡田光弘

マタイによる福音書　七章七節

「探(さが)しなさい。そうすれば、見(み)つかる。」

（二〇二六年七月の一学期終業礼拝説教）

今年の六月は雨が多く降りました。いつもは六月になると、表庭では水着を着る子どもが増え、水遊びをしたり、プールに入ったりしていましたが、今年はなかなか晴れの日が続かなかったり、気温が高くならなかったりしてプールを出すことができませんでした。先生は、プールで遊ぶのが大好きなのでとっても残念でした。みなさんは、どうだったのでしょうか。でも昨日、やっとプールで遊ぶことができました。年中組の子どもたちは初めて、年長組の子どもたちは一年振りのプールだったので、本当にたくさんの子どもたちがプールに入っていました。プールの中で楽しそうにおしゃべりをしたり、カップを使って料理をしたり、ペットボトルに水を入れて友だちや先生

にかけたりと、それぞれが楽しんでいました。水遊びをしなかった子どもたちも、プールに人が集まっていて、いつもより庭が空いていたので、サッカーや砂遊び、水たまりで泥遊びやお店屋さんごっこ、遊具で遊ぶなど好きな遊びを思い切り楽しんでいました。九月にも同じように遊べるといいですね。

年中組と年長組の子どもたちはお家の人と一緒にバスに乗って遠足に行きました。どこに行ったか覚えていますか。海の公園に行って、潮干狩りをしたり、水遊びをしたり、砂で遊んだりしました。先生は、みんなに危険なことが起きないように見ていたので、目が疲れたけど、みんなの楽しそうな顔を見ることができてとっても嬉しかったです。貝だけでなくナマコを見つけた人もいました。

年中組の子どもたちは、中高部のグラウンドの隣にある庭に行って走ったり、ダンゴムシを探したり、木の実を拾ったりしました。そこで見つけたダンゴムシは、幼稚園のダンゴムシよりも大きくて、びっくりしました。ちょっと暑かったけど、楽しかったです。

年長組は麻布図書館とその先にある公園に行ったり、みなと科学館へ行ってプラネタリウムを見学したり、キャンプに行ったりと幼稚園の外でも楽しく過ごしました。

先生は、どこに行っても感じることがあります。それは、貝もナマコもダンゴムシも生きているものは全て、神さまがお創りになったんだということです。プラネタリウムやキャンプで見た星も、暑い日差しを作る太陽も、暗い夜を明るく照らしてくれる月も、神さまがお創りになられたのです。勿論、私たち人も神さまがお創りになられました。そう考えると、神さまって本当にすごいお方だなって思うのです。

神さまは、ここにいる一人ひとりのことを考えてくださっています。一人ひとりに合った道を用意してくださっ

ています。もしかすると、少し遠回りの道が用意されていることもあります。でも、神さまは、たとえ遠回りの道でも、その人に合った方法で道を選んでくださっているので、友だちと違っていても心配しないでください。

明日から九月三日まで、夏休みです。きっと、それぞれ違っていてもいろいろな経験をすると思います。楽しみですね。夏休みの間、一つ覚えていてほしいことがあります。

今日お読みした聖書の箇所は、マタイによる福音書の七章七節の中の一部分です。全部お読みしても良かったのですが、先生がみんなに一番伝えたかった御言葉だけを切り取りました。

覚えていますか。「探しなさい。そうすれば、見つかる。」です。

自分で気になったこと、何だろうと思ったこと、どうしてだろうと思ったこと、不思議だなって思ったことがあったときに、お家の人と一緒になるほどと思える答えを探してみてください。みなさんくらいの年の頃に自分で探して見つけたものは、きっと大きくなっても覚えていると思います。みなさんは、どんなものを探して見つけるのか、先生も楽しみにしています。

そして、神さまが全てを創られたことも忘れないで、感謝できると嬉しいです。

四月から今日まで守り導き成長させてくださった神さまに感謝して、楽しい夏休みを過ごし、九月四日の始業礼拝の日に元気にお会いできることを今から楽しみにしています。

神さまがくださった家族

大学付属かえで幼稚園長　永瀬真澄

エフェソの信徒への手紙　六章二～三節

「父と母を敬いなさい。」これは約束を伴う最初の掟です。「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる」という約束です。

ヨハネによる福音書　一三章三四節

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

＊かえで幼稚園では五月の第四月曜日に家族の日礼拝をします。（母の日と父の日の間）この日年少組は家族といっしょにお弁当を食べ、礼拝を守ります。年中、年長組は子どもたちだけで礼拝を守り、帰る時に家族への気持ちを込めた絵をお迎えに来てくださった家族に渡し

ます。これは年中、年長組の礼拝で伝えたお話です。

聖書の中に「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」という言葉があります。神さまが私たちを愛して大切に思ってくださっていますからあなたも近くにいる人、周りの人をお互いに大切に思いなさい、という言葉です。

私たちの一番近くにいる人はお母さん、お父さん、家族ですね。

今日はともこちゃんという女の子のお話をしますね。

ともこちゃんの家族はお父さん、お母さん、そして妹です。ともこちゃんは幼稚園に行っています。妹は少し前に生まれたばかりの赤ちゃんです。赤ちゃんが生まれて、お姉ちゃんになったともこちゃんはとても嬉しい気持ちでした。赤ちゃんは寝たり、泣いたり、ともこちゃんが「いないいないばあ」ってすると笑ったりしました。「赤ちゃんてかわいいな」とともこちゃんは思っていました。赤ちゃんは少しずつ大きくなってこの頃はおすわりをしたり、ミルクだけでなくて、柔らかいごはんが食べれるようになってきました。

お父さんもお母さんも赤ちゃんのことをいっぱいほめます。「おすわりできてすごいね」「ご飯いっぱい食べたね」手を振っただけで「バイバイできたのね」ともこちゃんはなんだか、おもしろくなくて心がモヤモヤしました。「おすわりだけじゃなくて、私なんて歩くこともジャンプもできるのにな」「ご飯だけじゃなくて、ちょっと苦手なニンジンだって今日は食べたのに」「バイバイだけじゃなくて私はじゃんけんもできるし、お絵描きしたり、ハサ

ミで紙だって切ったりできるのに……」と赤ちゃんを見ながらともこちゃんは思いました。

ある日のご飯の時です。ともこちゃんは張り切っていつもよりご飯やおかずをいっぱい食べました。お箸だって使ってみました。ご飯を食べながら、チラッとお父さんとお母さんを見ました。お母さんもお父さんも赤ちゃんにご飯を食べさせるのに忙しそうです。二人ともともこちゃんがこんなにたくさんご飯を食べているのに何も言いません。

ともこちゃんは（そうだ、今日幼稚園で踊ったダンスをお母さんとお父さんに見せよう）と思いつきました。そこで「ねえ、今日こんなダンス、幼稚園で踊ったよ」と言って、椅子から降りると、ジャンプをしてくるっと回って見せました。

お父さんは「へえ、そういうダンスを踊ったんだね。でもともこ、今はご飯中だよ。ちゃんと座って」と言いました。ともこちゃんは（赤ちゃんはご飯中にバイバイしても怒られないのに！）とお父さんに言いたかったけれど、言えなくてすごすごと椅子に戻ろうとしました。戻る途中でうっかり、ともこちゃんはコップを倒してしまいました。お母さんが「あらあら」と言って、だいふきんを取りに行きました。

お父さんは「ともこ、ご飯の時に踊ったりするからだよ」と言いました。

ともこちゃんは悲しくなって涙が出てきました。

「お父さんもお母さんも赤ちゃんのことばかり褒めてともちゃんのことは嫌いなの？」とわんわん泣きました。

お父さんとお母さんはともこちゃんを見てびっくりして言いました。「ともこのことを嫌いなわけないわ。大好きよ。大切よ」

その日の夜、寝る前、お母さんにともこちゃんはお父さんとお母さんが赤ちゃんのことばかりを褒めるから、ともこちゃんを嫌いになってしまったと思ったと話しました。

お母さんは、ともこちゃんの話を聞いて、「そうだったのね。赤ちゃんもともこちゃんも神さまからいただいた大切な宝物よ」と話してくれました。お母さんはともこちゃんのことをギュッと抱き寄せてくれました。お母さんの胸に顔をうずめたともこちゃんの心はもやもやがなくなり、あたたかい気持ちになっていきました。

神さまは私たちに家族をくださいました。

神さまが私たちを愛してくださっているように私たちもお父さん、お母さん、家族を大切にしたいと思います。お父さん、お母さん、家族の一人ひとりが大切な存在です。そのことは聖書に書かれています。

ともこちゃんのお父さんとお母さんはともこちゃんのこと、赤ちゃんのことを大切に思っています。ともこちゃんもお父さん、お母さん、赤ちゃんのことが大好きですね。



中高部の礼拝
（全校生徒・教職員が一日の始まりに心を落ち着かせ、
毎朝、礼拝をささげています）

東洋英和女学院　説教集　第九号

発行日　二〇二六年一一月六日

編　集　宗教教育委員会

発　行　学校法人 東洋英和女学院
東京都港区六本木五丁目一四番四〇号
☎〇三・三五八三・三三二五

